



① 《清香妙音（せいこうみょうおん）》1927年（昭和2年） 個人蔵

吉川 霊華展

近代にうまれた線の探究者

2012年6月12日（火）－7月29日（日）
東京国立近代美術館

- この画家こそ、筆を「使えた」最後の世代の最高峰です。
- 作品を好んでくれる人々に支えられ、展覧会から離れたところで古典と線描美を探究した、忘れられた巨人を復活させます。
- 回顧展は1983年にサントリー美術館で開催されて以来およそ30年ぶりです。
- およそ400点の作品調査を経て選ばれた約100点、スケッチ帳38冊、模写、草稿、資料、印章などを出品。みなさんがほとんどご覧になったことのないものばかりです。
- 幻の代表作《離騷》（1926年、個人蔵）も出ます。

展覧会概要

吉川霊華（きっかわ れいか、1875-1929）
といってもほとんどの人はご存知ないかもしれません。

物語や道釈人物（どうしゃくじんぶつ）を画題としているからといって、敬遠しないでください。霊華の作品の魅力はその線にあります。細く、速度をもってリズムカルに継がれてゆく線が、山となり雲となり、人をかたどったかと思えば、余白に散らされた仮名となる。書も画も一体となったようなその独歩の世界に息をひそめて近づくと、かすかに、たとえようもなく美しい音曲が聞こえてくるはずです。

やまと絵の研究からはじめて広く東洋芸術を視野におさめた霊華。1916年に鏑木清方（かぶらき きよかた）や平福百穂（ひらふく ひゃくすい）らと結成した金鈴社（きんれいしゃ）という舞台を得て画壇にその名が知られるようになって、帝展などの大きな展覧会からは距離を置き、孤高の芸術を拓きました。その信念は、「正しき伝統の理想は復古であると同時に未来である」という言葉に現れています。やがて時代が霊華に追いつき、昭和にかけてさまざまな線描美の探究がおこなわれたなかでも、霊華はゆうゆうと孤高を保ち続けました。

展覧会芸術から遠いところに花開いた近代のもうひとつの美の世界。代表的作品ならびに数多くの初公開作品を含む約100点と、20代からの38冊に及ぶスケッチ帳、草稿、資料などを紹介する本展で、近代にうまれた線の探究者にして忘れられた巨人を発見してください。



② 《藐姑射之処子（はこやのしょし）》

1918年（大正7年）東京国立近代美術館蔵

第1章 模索の時代

初め風俗画、次いで狩野派の手習いを受けた霊華は、明治30年頃（1896～97）、有職故実（ゆうそくこじつ）の研究者である松原佐久（まつばら すけひさ）に師事しました。

霊華は松原の影響から幕末の復古大和絵派の冷泉為恭（れいぜい ためちか）に私淑。一方、松原を通じて交友が広がり、山名貫義（やまな つらよし）からやまと絵の教えを受け、小堀鞆音（こぼり ともと）等の歴史風俗画会（れきしふうぞくがかい）、国風会（こくふうかい）、大坪正義（おおつぼ まさよし）等の国風画会（こくふうがかい）、真美会（しんぴかい）、鏑木清方等の烏合会（うごうかい）等に参加しています。

この時期、霊華が描いていたのは、主として歴史風俗画会等でのコスプレ写生で培った正確な人体把握をベースとする歴史風俗画や、為恭研究に発した筆墨による草画でした。画壇での評価よりもむしろ自身の研究につとめ、それ以上に学識を広げることに力を入れた霊華は、すでに30代にして「文人」の風格をまといっていました。



③ 《神龍（しんりゅう）》

1911年（明治44年）京都・方廣寺蔵



④ 《美人弾琴（びじんだんきん）》

1904年（明治37年）個人蔵

第2章 金鈴社の時代

大正5年（1916）5月、日本美術学院を主宰する田口掬亭（たぐち きくてい）の斡旋により金鈴社が結成され、霊華は、結城素明（ゆうき そめい）、平福百穂、鏑木清方、松岡映丘（まつおか えいきゅう）とともにそのメンバーとなりました。このとき霊華はすでに41歳となっていました。

金鈴社は各メンバーが自由に研究することを旨とし、その研究発表の場として展覧会を開きました。

この時期から霊華は、日本や中国の古典文学や伝説にロマン的な題材を探り、確信をもって線描美の探究に取り組みました。

霊華の独歩の研究がめざましく進展し、自由に大作にとりくめたのも、審査や一般の好みにわずらわされない金鈴社という場があつてこそでした。そして、わずか7年弱の金鈴社の時代は、霊華を画壇の雄へとおしあげ、支援者を広げ、その画家としての人生を大きく変えていきました。晩年の霊華に特徴的な、速度をもってリズムカルに継がれてゆく涼やかな細い線は、この時期に完成の域に達してゆきます。



⑤ 《香具耶姫昇天 竹取物語（かぐやひめしょうてん たけとりものがたり）》
1920年（大正9年）個人蔵

第3章 円熟の時代

金鈴社が解散したとき、霊華は作品を出品しないままにすでに帝展の推薦を受け、審査員にも挙げられました。金鈴社での活躍のほか、その博識と論評が高く評価されていたことであったでしょう。霊華は、一方では大正15年（1926）の帝展に満を持して白描淡彩画（はくびょうたんさいが）の大作《離騷（りそう）》を発表し、他方では画中に仮名書を添えた、草々とした味わいのある作品を次々と生み出していました。「正しき伝統の理想は復古であると同時に未来である」と語り、伝統復古と現代の理想を結び付けることを追求した霊華は、ここに至り清冽にして典雅な画境へと入っていったのです。

I. 中国の詩と説話

幼少より漢籍に親しんでいた霊華は、金鈴社の時代に引き続き、中国の詩や説話に題材をとった作品を描き続けています。これらの作品は犯しがたい気品と高踏な雰囲気醸成されています。



⑥ 《羅浮僊女（らふせんによ）》1928年（昭和3年）埼玉県立近代美術館蔵

II. 和歌と古典物語

画中に歌の散らし書きを添えるスタイルを、晩年の霊華は一つの特徴的なレパートリーとしていました。画中に散らされる仮名は、絵をなす白描の線とまさに同質であり、ここに至って書と画が文字通り一致する独特の画境が開かれました。



⑦ 《つつみつつ》1926年（大正15年）個人蔵

Ⅲ. 仏と祈り

本節で紹介する作品は5点にとどまりますが、霊華の描いた仏画は生涯を通じて実はかなりの数に及びます。支援者からの依頼が多かったという事情もあるでしょうが、霊華自身が仏教や図像に興味をもって研究し、進んで制作したことにもよります。逡巡のない清冽な線で描かれた仏はいかにも清浄な雰囲気を帯びています。



⑧ 《阿摩提観世音菩薩（あまだいかんぜおんぼさつ）》
1924年頃（大正13年頃） 個人蔵

略歴

- | | | |
|-----------|-------------|--|
| 1875年 | （明治8年） | 5月4日 東京湯島に儒学者吉川澹齋（たんさい）の三男として生まれる。名は準（ひとし）。 |
| 1883年頃 | （明治16年頃） | 浮世絵系の画家・橋本周延に手習いを受け、延景の号を受ける。 |
| 1889年 | （明治22年） | 書家・中根半嶺に書を習い、半谷の号を受ける。 |
| 1896-97年頃 | （明治29-30年頃） | 知人を介して有職故実家の松原佐久に師事し、教えを受ける。
松原の影響で幕末の復古大和絵派の冷泉為恭に私淑する。 |
| 1897年 | （明治30年） | 第2回日本絵画協会展に《秋郊》を出品する。 |
| 1901年 | （明治34年） | 日本美術協会展に《吉野潜幸》を出品する。 |
| 1904年 | （明治37年） | 第9回烏合会展に《逍遙》《美人弹琴》を出品する。
日本美術協会展に《聖徳太子図》を出品し、3等賞銅牌を受ける。
この間、国風画会、歴史風俗画会、国風会、真美会等の研究会に参加する。 |
| 1911年 | （明治44年） | 京都・方廣寺の天井画《神龍》を揮毫する。
第5回文展に《菩提達磨》を出品する。 |
| 1915年 | （大正4年） | 美術雑誌『中央美術』の編集同人となる。 |
| 1916年 | （大正5年） | 金鈴社を鏑木清方、平福百穂、結城素明、松岡映丘とともに結成する。
この間、金鈴社の全7回の展覧会に出品し、次第に画壇に知られるようになり、依頼画が増える。 |
| 1919年 | （大正8年） | 帝展の推薦を受け、この年より毎秋欠かさず正倉院の拝観にでかける。 |
| 1921年 | （大正10年） | 比叡山延暦寺に《伝教大師》を揮毫する。 |
| 1926年 | （大正15年） | 第7回帝展に《離騷》を出品する。官展出品は15年ぶり。
京都俵屋旅館に逗留し、翌年京都に別宅を借りる。 |
| 1929年 | （昭和4年） | 3月25日 腸チフスにて死去。54歳。 |

本展覧会の逸品 (表紙の作品)

《清香妙音》1927年（昭和2年） 紙本墨画淡彩・軸 50.0×70.3cm 個人蔵

画題は能の「東北（とうぼく）」から。和泉式部（いずみしきぶ）という名の梅の傍で僧が読経していると、式部の亡霊が現れ、歌舞の菩薩となったと告げます。

梅の枝はスピードがあって起筆や終筆がはっきりした線。



よく見てください。梅の花弁には白の胡粉（ごふん）がかすかにぬられています。



この細い線も、速度をもって、すつと、ひかれています。そこが小林古径や前田青邨が学んだという高古遊絲描（こうこゆうしびょう）とは異なる点です。



この髪、絹糸のように細く神技です。

着物の模様や撥にも胡粉。紙地の白とのわずかな色の差を使いこなしているのです。



正倉院の楓蘇芳染螺鈿琵琶（かえですおうぞめらでんのびわ）にそっくりです。捍撥絵（かんばちえ）は騎象奏楽図（きぞうそうがくず）とは少し違う図のようですが。霊華の正倉院御物の捍観と研究は、こういうところに現れます。



展覧会名	吉川霊華展 近代にうまれた線の探究者
会期	2012年6月12日(火)～7月29日(日)
開館時間	10:00～17:00 (金曜日は～20:00) *入館は閉館30分前まで
休館日	月曜日(7月16日は開館)、7月17日(火)
主催	東京国立近代美術館
助成	公益財団法人アサヒビール芸術文化財団、公益財団法人花王芸術・科学財団、 公益財団法人三菱UFJ信託地域文化財団
会場	東京国立近代美術館 企画展ギャラリー(1階)
アクセス	東京メトロ東西線竹橋駅1b出口 徒歩3分 〒102-8322 東京都千代田区北の丸公園3-1
観覧料	一般850円(600円)、大学生450円(250円) ()内は20名以上の団体料金、いずれも消費税込。 *高校生以下および18歳未満、障害者手帳をお持ちの方とその付添者(1名)は無料。 *上記料金で入館当日に限り、同時開催の「写真の現在4：そのときの光、そのさきの風」、 所蔵作品展「近代日本の美術」もご覧いただけます。 開館60周年記念企画 誕生日は無料！ 開館60周年を記念して、ご自身の誕生日当日にご来館いただいた方は無料で入館していただきます。証明できるものをお持ちください。
お問合せ	03-5777-8600(ハローダイヤル)
HP	http://www.momat.go.jp
講演会	2012年7月7日(土)14:00～15:30 笠嶋忠幸(出光美術館学芸課長代理) 講堂(地下1階)にて、申込不要、聴講無料(先着150名)
ギャラリートーク	2012年6月23日(土)14:00～15:00 鶴見香織(当館主任研究員・本展企画者) 2012年6月30日(土)14:00～15:00 同 2012年7月 6日(金)18:00～19:00 同 会場にて、申込不要、参加無料(要観覧券)
同時開催	「写真の現在4：そのときの光、そのさきの風」ギャラリー4(2階) 2012年6月1日(金)～7月29日(日) 所蔵作品展「近代日本の美術」(4～2階) 2012年5月12日(土)～7月29日(日)

「吉川霊華展 近代にうまれた線の探究者」報道関係お問合せ先

TEL：03-3214-2561(代表) / FAX：03-3214-2576 / e-mail：pr@momat.go.jp

■FAX送付先：東京国立近代美術館 広報担当行 03-3214-2576■

吉川霊華展 近代にうまれた線の探究者 広報用画像&読者プレゼント招待券申込書（FAX専用）

お名前： _____ ご所属・媒体名： _____

出版物・放送番組名： _____

発行・放送予定日（日時）： _____ 年 _____ 月 _____ 日 _____ : _____ ~ _____ : _____

ご住所：〒 _____

TEL： _____ FAX： _____

メールアドレス： _____

*** 貸出をご希望するデータの口にチェックをつけてください**

	1	せいこうみょうおん 《清香妙音》1927年(昭和2年) 個人蔵
	2	はこやのしょし 《藐姑射之処子》1918年(大正7年) 東京国立近代美術館蔵
	3	しんりゅう 《神龍》1911年(明治44年) 京都・方廣寺蔵
	4	びじんだんきん 《美人弾琴》1904年(明治37年) 個人蔵
	5	かぐやひめしょうてん たけとりものがたり 《香具耶姫 昇天 竹取物語》1920年(大正9年) 個人蔵
	6	らふせんによ 《羅浮僊女》1928年(昭和3年) 埼玉県立近代美術館蔵
	7	《つつみづつ》1926年頃(大正15年頃) 個人蔵
	8	あまだいかんぜおんぼさつ 《阿摩提観世音菩薩》1924年頃(大正13年頃) 個人蔵

画像データ貸出希望日時	_____ 月 _____ 日 _____ 時頃までに希望
読者プレゼント招待券	_____ 組 _____ 名(合計 _____ 枚) 希望します

プレス・イメージ貸出条件

1. 画像は、展覧会紹介の目的にのみご使用ください。
 2. データを第三者に渡すことは禁じます。使用後、画像データは消去してください。
 3. 展覧会の名称、期間、会場は、適切な場所、大きさに明示していただくようお願いいたします。
 4. 作品画像は全図で使用してください。部分使用やトリミング、作品に文字を重ねることはできません。
 5. 画像を掲載される際には、イメージ貸出時に添付するクレジットをご記載ください。
 6. 掲載紙（誌）は、1部、企画展室宛にご寄贈ください。webサイトの場合は、掲載時にお知らせください。
- * 画像データ(JPEG)にてお貸出いたします。その際、一緒にお送りするキャプションもご確認ください。
- * 掲載前に、校正紙をお送りください。お送りいただけない場合、掲載内容についての責任は当方では負いかねます。

<報道関係のお問合せ>

東京国立近代美術館 企画課 企画展室

〒102-8322 千代田区北の丸公園 3-1 TEL：03-3214-2561（代表） / FAX：03-3214-2576